師匠・杉本昌隆七段が語る

藤井聡太 四段の誕生の棋跡

史上5人目の中学生棋士

四段昇段を決め史上最年少プロとなり、記者会見する藤井聡太三段（当時）＝昨年9月3日、将棋会館で

師匠杉本昌隆七段をとのツーショットに納まる藤井聡太四段

▼杉本昌隆（すぎもと・まさたか） 1968年、名古屋市生まれの48歳。21歳で四段。デビュー当時「棋界唯一の本格正統派振り飛車党」と称された。2001年、朝日オープン準優勝。順位戦B級1組は4期、竜王戦1組は8期。12年から2年間、日本将棋連盟非常勤理事。地域普及推進棋士。大のドラゴンズファンでもある。弟子には藤井四段のほか、室田伊緒女流二段、中澤沙耶女流初段ら。

▼藤井聡太（ふじい・そうた） 2002年7月19日生まれ、愛知県瀬戸市出身。5歳の時に祖母から教わり将棋を始める。11年8月、全国小学生倉敷王将戦・低学年の部優勝。奨励会へは12年9月、6級で入会。15年10月、三段に昇る。三段リーグは16年4月開幕の第59回に参戦。9月、13勝5敗で1位通過し、加藤一二三九段の持つ最年少記録を5カ月更新する14歳2カ月で四段に昇段した。デビュー戦は12月24日、くしくもその加藤九段と戦い勝利。プロ高段者も参加する「詰将棋解答選手権」は15、16年と連覇。名古屋大学教育学部付属中2年。

①半年のブランク

―「鬼のすみか」とも称され、あの渡辺明竜王でも2期抜けだった三段リーグ。「天才藤井でもさすがに1期抜けは難しいのでは」というのが、事前の下馬評だったようですが。

杉本昌隆七段（三段昇段から三段リーグ開幕まで約半年間、ブランクがあったのも不利な材料でしたね。あれは開幕直前の昨年3月、春休みを利用して師弟で東京に出かけた時のこと。島朗九段、中村修九段、森下卓九段、村山慈明七段、飯島栄治七段、中村太地六段、八代弥五段、増田康宏四段、高見泰地五段、石井健太郎四段、梶浦宏孝四段らと2泊3日で研究会をしたのですが、20代の棋士には大幅に負け越し。「三段には負けられない」と、対戦相手も当然目の色が違う。足取り重く愛知に戻った藤井でした。

確かにこの頃、私と1対1で行っていた研究会でも、1勝1敗が多かった。私と指し分けでは突き抜けられませんからね（笑い）。以前の切れ味がやや影を潜め、やはり半年間公式戦を指していない影響があるのか心配になったものです。だが今思えば、これは棋風の転換期。例えて言えば新球をマスターしようとしている時のようなもの。結局は藤井の驚異の成長力が、不利な条件すらプラス材料に変えてしまったのです」

―開幕の4月23日は1勝1敗で、周囲の期待からすると、ややスロー発進でした。プレッシャーはかなりのものだったはずですが、ここで13歳の少年が見せたレジリエンス（復元力）は大したものでした。

「将棋の内容は反省するが勝敗は気にしない。この切り替えがきちんとできていたのでしょう。5月7日を2連勝で乗り切り、迎えたのが5月29日の天王山。この日は優勝候補の2人、大橋貴洸三段、池永天志三段との対局。リーグ初参戦で順位が27位の藤井にとってはこのいずれかでも落とすと、昇段は遠のいてしまう。絶対負けられない戦いでした」

②5月29日 大橋戦 絶体絶命の大ピンチ 会心「5二と」から25手詰め

まずは大橋戦。藤井四段ならではの妙手が出たそうですね。

「矢倉の熱戦で藤井リードの終盤（図1）。金を外す▲8四飛成は△8二金▲9五玉△9四歩以下藤井玉は詰み。大橋玉を詰ますしかないが、▲7二飛成△同玉▲6四桂は△8二玉で不詰み。藤井絶体絶命と思いきや、手がかりのと金を捨てる▲5二とが作ったような決め手でした。

△同金に▲7二飛成△同玉▲6四桂△8二玉▲8一金△同玉▲3一竜とする（図2）。さすが『詰将棋解答選手権』優勝者の寄せで、これが▲5二との意味。

実戦は△5一角と受けたが、▲同竜△同金▲7二角△8二玉▲8三金△同玉▲同角成△同玉▲7二角△8二玉▲8三金△7一玉▲8一角成△同玉▲7二桂成で詰めたにない。藤井の武器の終盤力、切れ味がよく表れていた。後日、一門研究会で兄弟子らに「この将棋を見せていた藤井。本人にとっても会心の一手だったのでしょう」

図1 【△7二金まで】 ▲藤井 角金桂歩三 △藤井 角歩二

図2 【▲3一竜まで】 ▲藤井 角金歩二 △藤井 飛角金歩三

④9月3日 西山戦 最終戦で見せた新境地 大山流の渋い金引き

―天才少年が描く成長曲線と完全に合致した快進撃ですから、これはなかなか止められない。これ自体「神ってる」わけですが、さらに「神ってる」ぶりを際立たせたのが、首位で臨んだ最終日のドラマでした。やはり勝負師として欠かせないものといえば強運。これを併せ持っているのも心強い限りですね。

「2勝なら自力、1勝1敗なら他力昇段だった最終日。何と1局目に敗れて自力が一瞬消えたのですが、これが三段リーグの怖さ。ところが、ここで競争相手の池永三段、甲斐日向三段もそろって負け、自力が復活したのです。九死に一生を得たこの流れで、今までここ一番は必ず勝ってきた藤井。2局目まで落とす姿は想像できず、安心して朗報を待っていました」

―最終局の西山朋佳三段戦も、新境地をうかがわせる戦いぶりだったようですね。

「西山のゴキゲン中飛車に対し、藤井は超速▲6六銀戦法。私と研究会で何局も指している形で藤井の得意戦型です。西山の序盤のミスをとがめて藤井十分の中盤戦（図5）。ここで▲5七桂△4八銀▲4六金（図6）が大山康晴十五世名人を思わせる渋い金引き。『絶対に負けない』という気持ちが伝わってきます。藤井は△同飛▲同歩△4四桂を気にしたようですが、結果的にこれが西山三段の疑問手△6四桂を引き出しました。藤井はすかさず▲同銀と取り、△同歩▲4五桂。先手が有利を決定づけました」

―過去4人の中学生棋士は全員、頂点を極めています。中学生棋士という称号がエリート中のエリートを意味するのは、年齢的なアドバンテージによる伸びしろが大きいからでしょう。

「『愛知県にタイトルを』というのが故谷一門の悲願ですが、藤井ならきっと実現してくれるはず。その出発点となる三段リーグもまた、後々まで語り継がれていくでしょう」

図5 【△4二飛まで】 ▲藤井 桂歩五 △西山 銀桂

図6 【▲4六金まで】 ▲藤井 歩五 △西山 桂

将棋も成長期 隙なくなった 間合い読み絶妙な踏み込み

③5月29日 池永戦

―続く池永戦はどうでしたか。

「大橋戦とは対照的に渋い指し回しで藤井リード（図3）。ただ、△2七歩成が間に合うと難しくなる。候補手はいろいろあるが▲4八馬が柔軟な手。これに△2七歩成は▲1五馬と馬銀成▲5八馬△3六桂と馬を封じ込められるが、▲2四金（図4）が俗手の好手。失敗すると悪手になる重い手だが、自玉と相手玉の間合いを読み切り、ズバリ踏み込んだ藤井ならではの決め手でした。以下△2七歩成▲2三と△4二玉▲3三と△3八と▲3四と△4九と▲2九飛▲5三桂と、一直線に攻め合って勝ち。

この2連勝で流れをつかんだ藤井。以後、白星を積み重ねるなか、負かされた三段陣からは一様に『完敗でした』と脱帽する声が聞かれるようになりました」

図3 【△3二玉まで】 ▲藤井 金銀香 △池永 桂歩四

図4 【▲2四金まで】 ▲藤井 銀香 △池永 桂歩四

三段リーグでの激闘と成長

昨年、将棋三段リーグを最年少記録で勝ち上がり、史上5人目の中学生棋士となった藤井聡太四段（14）。2017年、高みを目指す本当の戦いが始まるが、やはりファンとして振り返っておきたいのは、これこそ正真正銘「神ってた」三段リーグでの戦いぶり。全18局のうち、ポイントとなった大一番で藤井四段はどのような妙手を放ち、才能の違いを見せつけたのか。それらの激戦を切り抜けるなか、若武者が描いた成長曲線とは―。まな弟子の姿を見守った師匠の杉本昌隆七段（48）に秘話を交え明かしてもらいました。

（聞き手・海老原秀夫）

化を感じたのがちょうどこの頃でした。それまでは攻めが鋭すぎるあまり、必要以上に攻め合う傾向があり、時に自爆することもありました。それが相手の攻めをあえて呼び込み、受け流してカウンターパンチを浴びせるような指し方も見せるようになったのです。

同時に、以前から課題とされていた序盤の荒さも消え、今では序盤巧者といえるほど。もちろん、持ち味の終盤力は健在で将棋に隙がなくなりました。

中学2年といえば、心身ともに成長期の真っただ中。将棋もごく自然に成長し、スケールが一層大きくなった印象を受けました」

◆藤井四段の三段リーグ成績◆

対局日	対戦相手	勝敗
4月23日	関矢寛之（14位、武者野）	○
	谷合広紀（9位、中座）	●
5月7日	石川優太（2位、森信）	○
	慶田義法（23位、井上）	○
5月29日	大橋貴洸（1位、所司）	○
	池永天志（5位、八木健）	○
6月5日	出口若武（15位、井上）	○
	山本博志（21位、小倉）	●
6月19日	枡田悠介（20位、井上）	○
7月2日	本田奎（11位、富田利）	●
	三田敏弘（13位、中田章）	○
7月17日	柵木幹太（29位、増田裕）	○
	里見香奈（25位、森けい）	○
8月2日	西田拓也（8位、森信）	●
8月17日	荒木隆（17位、森信）	○
	冨田誠也（16位、小林健）	○
9月3日	坂井信哉（12位、富田利）	●
	西山朋佳（28位、伊藤祐）	○

※（）内はリーグ開始時の順位と師匠

「羽生先生のように純粋に」

番記者メモ

映画「聖の青春」で松山ケンイチ演じる村山聖九段のセリフが妙に心に残っている。「羽生さんの見ている海はみんなと違う」。羽生善治三冠だけが見られる「海」って何なのだろう？

AI（人工知能）を巡って揺れ動く棋界だが、しょせんAIが行うのは、組み合わせの中から答えを見つける作業。人間の脳には未解明の「勘」という働きがある。「海」はきっとその中にある。

シャイだが芯の強い14歳にも、その「海」がやがて見えるのでは―。周囲がこの少年に期待するゆえんだろう。先日「祝う会」で青野照市九段が言った。「将棋を深く追究する羽生さんのようになってほしい」。加藤一二三九段戦の3日後、藤井四段に話を聞いた。

「私も羽生先生のように純粋に盤に向かいたい」。そう力強く語ってくれた。

（海老原）